

機関リポジトリ支援のためのワーキンググループ

報 告

平成22年3月

1. はじめに ～ワーキンググループの目的

機関リポジトリは、いまや世界で 1400 機関以上、国内でも 100 を超える大学・機関等に普及している。機関リポジトリに対する社会の認知度も年々高まっており、大学等の機関で生産された学術研究成果の発信手段として、必要不可欠なものになりつつある。しかし、中小規模の機関では様々な事情により自機関だけでの構築が困難といった実情もある。

こうした背景の下、協議会としてどのようなサポートが可能かを検討するため、第 108 回（平成 21 年 7 月 30 日開催、於：大手前大学）総会の承認を得て、「機関リポジトリ支援のためのワーキンググループ（以下、「WG」という）」が結成された。

WG の目的は、機関リポジトリに対するメンバー館の共通理解を図るとともに、機関リポジトリ構築・運用のための支援策を検討することである。

以下に検討結果を報告する。

2. 議論の経緯

2.1 WG メンバー館の共通理解を図る

WG では、まず、メンバー館の機関リポジトリに関する現況について確認を行った。機関ごとに事情は様々だが、反対に共通の課題も浮彫りとなった。リポジトリ構築にあたり、機関の中でどのように気運を高め、理解を得て、予算を獲得するか。これらは機関の事情やシステムの構築方法によらず、リポジトリ構築にあたり必ず直面する共通の課題である。そこで、このような課題への対応と支援策検討の前提を固めるため、機関リポジトリの意義や理論的問題について、あらためて学ぶこととした。

議論に先立って、リポジトリ既構築機関より、教員への説明事例が紹介され、学内でのオーソライズプロセスの実情を学んだ。リポジトリ構築のメリットとしては、学術機関の説明責任遂行や社会貢献、研究成果の効果的な発信と恒久的な保存、オープンアクセス推進による学術コミュニケーションの変革などが考えられる。しかし、教員にとってはオープンアクセスや大学の広報的役割についての関心は薄いといった指摘もあり、対象者を意識した説明内容の必要性が確認された。

本題であるリポジトリの意義や理論的問題については、学術雑誌の価格高騰から学術コミュニケーション危機、そしてオープンアクセスへといった、リポジトリ誕生までの一連の背景について学ぶことで理解を深めた。

また、機関リポジトリで学位論文、研究報告書、授業の資料などを公開すれば、これまで灰色文献と呼ばれてきた様々な学術情報の流通にも繋がる。平成 20 年度には国立情報学研究所（以下、「NII」という）の紀要電子化事業が終了。学術コンテンツ登録システムは継続しているので、各機関が紀要を PDF 化することで CiNii への登録は可能だが、機関リポジトリを紀要公開のプラットフォームとして活用することも可能である。

以上のような経緯により、WG では、学術情報に対するオープンアクセス推進の重要性とその実現方法の一つとして機関リポジトリが有効であることについて、メンバー館の共通認識が確認された。

2.2 構築が困難な理由

WG の目的である「機関リポジトリの構築・運用の支援策を検討する」ため、未構築のメンバー館に困難な理由をまとめてもらい、どのような支援策が有効かを把握することとした。

それぞれの組織のあり方や規模などによる事情で異なる部分はあるものの、多くの機関に共通する問題が明確になった。

まず、構築の障害となっているのは、機関としてのリポジトリの必要性についての認識不足や構築への合意を得ることが容易ではないことが挙げられた。リポジトリがどのようなものであるかも理解されていない状況が伺われる機関もあった。機関だけではなく、構築・運用の実務を担うであろう図書館などの部署内での共通認識も不足しているところが多いようである。

具体的には、構築するには何をすればよいかわからないといったノウハウやシステムなどリポジトリについて知識・技術が不足していることが問題となっている。

また、システム構築に必要なハードウェアの購入やシステム設定および維持管理に掛かる予算の確保が難しく、それらの業務を担うスタッフが不足していることも大きな課題となっている。

さらに、既構築機関の多くもリポジトリの中味であるコンテンツ収集が思うように進まず苦勞していると聞くと、未構築機関でもコンテンツに関する不安を抱えるところが少なくない。国内の大半の機関で最初に登録される自機関発行の紀要の収集も簡単ではないという話もあった。

2.3 共同リポジトリについて

共同リポジトリとは、複数機関で生産された教育研究成果などを一つのサーバに蓄積・保存する方法で構築されたものである。

共同リポジトリでは、一機関あたりの構築・運用経費の負担が軽減し、参加機関で技術やノウハウが共有できるというメリットがある。

国内では地域単位で構築された共同リポジトリが 8 つあり、構築済み機関のうち公立・私立大学の約半数、短期大学・高等専門学校が 100% が共同リポジトリに参加していることから、中小規模機関のリポジトリ導入を阻む障壁を除去し、オープンアクセスの裾野を拡大するという目的が果たされていることが伺える。

また、一般的に共同リポジトリには参加機関の独自性を出しにくいという制約があるが、カスタマイズすることで解消されつつある。

2.2 からわかるように、経費や技術・ノウハウの問題は WG メンバー館のリポジトリ構築に対する不安要素でもあるため、兵庫県でも共同リポジトリの構築は未構築機関に対する有効な支援策といえる。同時に、県下の大学図書館間の交流の活性化につながることも期待できる。

一方、共同リポジトリでも、機関内の合意形成やコンテンツ収集・登録などについては各機関で取り組む必要があり、ハードウェア管理などを担うこととなるホスト機

関には過大な負担がかかるという問題が存在する。

2.4 NII の動向について

平成 21 年 7 月の文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会の『大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）』のなかで、「個別の大学等によっては、事務体制や技術的な問題等により、独自でリポジトリの構築・運用を行うことが難しい機関もある。したがって、こうした機関に対して、各機関が共通利用できる共用リポジトリシステムを構築することにより、リポジトリへのコンテンツの登載や公開が容易になるような仕組みを早急に検討する必要がある。」と報告されている。

NII ではこれを実現するために検討を進め、平成 22 年 2 月 2 日付の学術機関リポジトリ構築連携支援事業の平成 22 年度委託事業基本方針において、「機関リポジトリの構築を検討している機関向けに、NII がシステム基盤（ハードウェア・ソフトウェア）を第 3 期中に整備し、リポジトリシステム構築の選択肢として提供する。」ことを発表している。（平成 22 年度～平成 24 年度の 3 年間）

このシステム基盤を利用する機関ではサーバを用意する必要はないと思われるが、ソフトウェアについてはどこまでサポートされるかが明確ではない。このため、現段階では単独、および共同による構築との比較は十分には行えないが、NII のサービスの詳細が明らかになった際には、協議会として再度検討することが必要であろう。

2.5 リポジトリシステム構築方法の比較一覧

機関リポジトリの構築には、現在機関ごとの単独構築と地域などで協力して構築する共同リポジトリがあり、近い将来 2.4 で述べた NII からシステム基盤が提供される見込みである。これで構築方法は 3 種類となり、構築する機関ではそれぞれの事情に合わせて方法を選択することになると思われる。

WG では、一つの支援策として共同リポジトリの有効性、実現性の検討を行うため、また、協議会がそれぞれのメリット・デメリットなど特徴を把握し、有効な支援を実施するうえでの参考となるよう各構築方法の比較表を別紙のとおり作成した。

なお、2.4 でも述べているとおり、NII から提供されるシステム基盤については、詳細が明らかになった時点で見直しが必要である。

また、NII のシステム基盤上では単独、共同の 2 種類の構築が可能であろうと考えられるが、比較一覧は単独構築を行うことを前提として作成している。

3. 支援策について

機関リポジトリを構築するためには、クリアしなければならない多くの問題や不安要素が存在する。共同リポジトリが構築されれば、これら大部分の解決が期待できるが、2.3 と 2.4 で述べたように、なおも残る問題があることと NII の動向が明確でないため、現時点では構築の是非についての検討を留保することとした。

しかし、先行機関の様々な情報は、未構築機関のみならず既構築機関にとっても大い

に参考となる。そこで、こうした情報の入手を容易にする体制や機関を超えた横のつながりを強化する人的ネットワークを構築することは、支援策として有効であるという結論に達した。そこで WG では、下記のような文言をもって協議会としての姿勢を明確にし、その下で機関リポジトリの構築・運用を強力に支援することを提言する。

「兵庫県大学図書館協議会は、機関リポジトリの普及とオープンアクセス推進のため、加盟館の機関リポジトリの構築・運用を支援する。」

具体的な支援策は下記の通り提案する。

3.1 メーリングリストの運用

機関リポジトリの構築・運用に関する事項についての自由な情報交換を目的とした、メーリングリストの運用。

参加資格 : 機関リポジトリに関する情報をのぞむ者

登録アドレス : 各機関ドメインのメールアドレス

リポジトリは機関全体の事業である。機関ごとの事情により異なるが、紀要発行担当部署・システム担当部署など、何らかの形でリポジトリ関連の実務に携わる部署は多岐にわたる。協議会として支援するのは機関リポジトリの構築・運用であって、その対象は図書館に限るべきではない。参加資格を限定しないことにより、兵庫県大学図書館協議会をベースに、機関リポジトリを核とした新たなコミュニティ形成が期待できる。

3.2 「兵庫県大学図書館協議会」WEB ページの活用

機関リポジトリの構築運用に役立つ情報を協議会の WEB ページで公開する。

公開情報は下記の通り提案する。

(1) 実務に必要な文書類の公開

(運営指針、公開許諾書、学内説明資料、電子化仕様書等)

(2) 既構築機関リポジトリシステムの詳細情報の公開

(サーバスペック、OS、ソフトウェア、バックアップ方法等)

(3) 機関リポジトリ構築支援業者一覧の掲載

(業者一覧と合わせて、兵庫県内の導入実績も掲載する。)

* 導入実績を元にして、メーリングリストを利用したさらなる情報収集も可能。

※ 定期的（年 1 回）に協議会から情報提供の依頼を行う。ただし、公開情報の範囲は各機関の判断に委ねる。

3.3 勉強会や研修会の開催

NII で検討中のシステム基盤（平成 22 年度委託事業基本方針）をはじめ、地域共同リポジトリや各分野でのサブジェクトリポジトリの広がりなど、リポジトリをとりまく状況は刻々と変容を続けている。また、機関リポジトリに関する業務は、図書館にとっても歴史の浅い分野であり、構築後も継続的な人材養成という課題が残る。

こうした状況を鑑みれば、リポジトリに関する勉強会や研修会の充実は、協議会が出来る重要な支援策の一つであると考えられる。

4. 終わりに

以上が、WG で協議した内容である。しかしながら共同リポジトリやNII の動向等も含めて、未だ継続的な検討を要する事項が残存する。これらは、協議会において今後も継続して検討を行うことが肝要である。

WG での検討はこれをもって終了とするが、本報告が企画委員会等で十分に協議され、実効性のある施策に発展することを期待する。

5. 活動記録

5.1 WG 構成員

氏名	所属	備考
石定泰典	神戸大学附属図書館	
中山貴弘	神戸大学附属図書館	オブザーバ
松林 史	兵庫県立大学学術総合情報センター	
安本裕和	関西学院大学図書館	
福中知子	武庫川女子大学附属図書館	主査
鶴目 健	神戸市外国語大学学術情報センター	主査
堀越みち代	甲南大学図書館	
横谷弘美	大手前大学図書館	
加川みどり	神戸松蔭女子学院大学図書館	

5.2 活動の過程

第1回

[日時] 平成21年10月6日(火) 14:00～

[場所] 神戸大学附属図書館プレゼンテーションホール(社会科学系フロンティア館3F)

[議題] (1) 各機関における機関リポジトリを巡る状況について
(2) ワーキンググループの今後の活動方針について
(3) その他

[議事概要]

● 各機関における機関リポジトリを巡る状況について

まず、既構築3機関から、サイトを紹介しながら、状況説明があった。

【神戸大学】(<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/>)

- ・ 本稼動から3年が経過し、コンテンツ数は1万件を超えた。
- ・ コンテンツは紀要論文が多い。現在、学位論文の収集に力を入れているが、義務化ができていくわけではなく、論文提出者に登録を呼びかける努力をしている。
- ・ コンテンツ収集は、メールでの依頼を中心としているが、登録依頼した以外のものも提供されることがあり、リポジトリの認知度が高くなりつつあるようだ。
- ・ 学内合意については、学長の諮問機関である「図書館審議会」で了承を得て、比較的スムーズに進んだ。初期費用はNIIのCSI委託事業費で賄えた。

【関西学院大学】(<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/index.jsp>)

- ・ 2005年に情報系の部署の報告書に盛り込まれたため順調にスタートが切れた。
- ・ 2005～2007年の準備期間を経て2008年春に本格稼動した。コンテンツ数は教員の認知度がさほどではないためか1400件くらいで、紀要論文が中心であるが、

最近、少し認知度が上がり、紀要論文以外の登録もある。

- ・ 機関リポジトリは副学長の下に組織があり、図書館が事務局を担う形式を採っている。
- ・ 博士論文は拒否しない限り登録する方向で動いており、要旨集については来年度分から掲載する予定。

【武庫川女子大学】(<http://libir.mukogawa-u.ac.jp/dspace/>)

- ・ 4月に機器を導入し、テスト公開中。近く本稼働を目指している。
 - ・ まず、CiNii (NII-ELS) に登録済みの紀要を掲載し、今後は電子データがあるものから始め、学術論文などはもう少し後になる見込み。
 - ・ 館内で構築を検討し、図書館委員会での反応は今一つであったが、大学トップの興味を引き、予算措置された。
 - ・ システム等の専門知識をもつ館員がいないため、苦勞して手探りで進めている。
- 次いで、未構築機関から状況説明があった。各機関により事情は様々であるが、大よそ以下のような状況である。

- ・ 「機関リポジトリ」という言葉について理解されていないことも多い。
 - ・ 図書館から大学側に必要性を説いているが理解を得るのが難しい。
 - ・ 大学としての意思決定ができていない。
 - ・ 上層部が理解を示している場合もあるが、逆に館員内の浸透が進んでいないこともある。
 - ・ 大学の知的生産物を公開して行く必要性を感じている教員はおり、現在、CiNii (NII-ELS) に紀要を登録しているが、リポジトリは必要と考えている。
 - ・ 「学内コンテンツのデジタル化」は、大学の中期計画に挙げられており、所管部署と調整中であるが、未だ手探りの状況である。
- ワーキンググループ（以下、「WG」という）の今後の活動方針について
- ・ 検討テーマとして、①理論的問題、②コンテンツ、③運用面の課題等を取り上げることにした。その後、機関リポジトリを巡る昨今の状況について、フリーディスカッションが行われた。
 - ・ WGの運営については、主査を神戸市外国語大学の鶴目氏、武庫川女子大学の福中氏の両氏にお願いすることとした。

第2回

[日時] 平成21年11月19日(木) 10:00～

[場所] 関西学院大学(西宮上ヶ原キャンパス) 図書館 2F 会議室

[議題] 「機関リポジトリとは何か? (理論的問題・意義について)」

[議事概要]

- 機関リポジトリ説明事例紹介

まず、関西学院大学図書館の服部氏に、教授会で実際に行っている機関リポジトリ説明会のデモを行っていただいた（資料1参照）。関西学院大学リポジトリの現況や説明会での反応などが紹介され、質疑応答が行われた。主な内容は以下のとおりである。

- ・ リポジトリの運営管理は「関西学院大学リポジトリ管理委員会」で行っているが、実質的な作業は図書館が担っている。システムを構築した後は、コンテンツ収集が中心業務となる。
- ・ コンテンツ収集は教員の意識改革が重要であるが、そのためには動機付けが必要であろう。評価につながるものであれば意識も変わるかもしれないが、今のところ、業績一覧とは連携していない。別に構想されている教員データベースとの連携は意識している。
- ・ 外国雑誌の高騰への対抗手段としてのオープンアクセスを説明してもあまり反応がない。
- ・ 日本では、大学のアピールのための手段としての意義が大きい。

● 機関リポジトリとは何か？（理論的問題・意義について）

主査によってまとめられたレジュメを元にして、機関リポジトリ誕生の背景や、機関リポジトリの意義について検討し、理解を深めようと努めた。

- ・ 学術コミュニケーションが出版社によりコントロールされるようになり研究者の手から奪われることにより学術コミュニケーションの危機がもたらされた。
- ・ 対抗手段としてオープンアクセスの概念が生まれ、その一環として、機関リポジトリが誕生した。
- ・ リポジトリの定義はいくつかあるが、Clifford Lynchの「大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信を行うため、大学がそのコミュニティの構成員に提供する一連のサービス」が広く受け入れられやすいのではないかと。

次いで、疑問点や様々な問題について意見交換があった。

- ・ 機関リポジトリに登録できる学術雑誌掲載論文は、著者最終稿であることが多く、無料で利用できることを歓迎する声がある一方、出版社版との違いから引用文献として有効なのかという疑問がある。
- ・ 機関リポジトリを構築することにより、図書館の存在意義を高めることができる。論文生産過程を知ることができるのは有意義である。また、教員との関係も密接なものとなる。リポジトリを巡るコミュニティの広がりにより、他大学との交流が活発になるというメリットもある。
- ・ 論文公開のプラットフォームを持たない層には有効であろう。
- ・ 未構築機関には、学内での合意形成がままならないこと、経費の問題、コンテンツの充実が図れるか、システム管理がうまくできるか、継続的に維持できるかなどの不安がある。
- ・ コンテンツが紀要だけならCiNii（NII-ELS）と同じでないのか。紀要以外のコ

ンテンツがあるのなら、リポジトリは有効だろう。

- ・ 機関リポジトリは、本来は大学で取り組むべきものであろう。メタデータや著作権についての知識・技術は図書館で扱い慣れているが、図書館でなければならぬ理由にはならないのではないか。

第3回

[日時] 平成21年12月18日(金) 10:00～

[場所] 関西学院大学(西宮上ヶ原キャンパス) 図書館 2F 会議室

[議題] 「共同リポジトリとはどんなものか」

[議事概要]

● 「共同リポジトリについて」

まず、前日、兵庫県大学図書館協議会研究会で講師を務められた広島大学附属図書館の尾崎氏に共同リポジトリについて、その意義、共同リポジトリの例、共同構築のメリットとデメリット、今後の展望などについてお話いただいた(資料2参照)。

NIIが構想している学術クラウド^{注)}を巡っての質疑、共同リポジトリの地域単位、ホスト機関と共同リポジトリの関係など共同リポジトリ全般についての質疑があった後、次のいくつかのテーマを設定して意見交換を行った。

注)「学術クラウド」は当時の呼称で、現在は「リポジトリシステム基盤」または単に「システム基盤」と呼ばれている。

● 共同リポジトリの種類について

- ・ 共同リポジトリ構築方法の一つとして、ソフトウェア共有型があり、baseURL、ログの切り分け等の課題はほぼ解決されているが、画面構成やメタデータの項目等はすべての参加機関に影響する。
- ・ ソフトウェア独立型の共同リポジトリでは、サーバの管理が複雑になることと、容量の大きなサーバが必要になるという問題がある。
- ・ 共同リポジトリと独立リポジトリが同一地域で共存する場合に横断検索の必要性については、Google、JAIRO、CiNiiからの利用者が多いため必要ないが、「地域」を主題としている場合には横断検索が必要であろう。

● 共同構築のメリット

- ・ 構築費用が抑えられる、技術・ノウハウの共有ができるというメリットがあるが、それ以外にも、コミュニティの連携が強くなったことが挙げられる。また、リポジトリを持ったことで、外部からの評価が上がった。
- ・ 留意事項として、参加機関が掲載したいコンテンツにより、メタデータ項目や公開方法が異なってくることもあるので、条件を集約した上で、サーバの規模や機能を決める必要がある。

- 単独構築のメリット
 - ・ 構築に当たっての自由度が高い。
- 次回の検討テーマは「リポジトリ構築が困難な理由と解決策」とし、次回までに、未構築機関は「リポジトリ構築が困難な理由」を、既構築機関は「共同リポジトリを構築する場合に必要なこと」をまとめ、メーリングリストに上げることとした。

第4回

[日時] 平成22年1月22日(金) 14:00～

[場所] 神戸大学附属図書館自然科学系図書館 4F 会議室

[議題] 「リポジトリ構築が困難な理由と解決策」

[議事概要]

● リポジトリ構築が困難な理由について

前回までは、機関リポジトリについての理解を深め、共通理解を図ることをテーマとしていたが、今回から、「兵庫県大学図書館協議会加盟館への支援策の検討」を主なテーマとすることとした。支援策を検討するためには単独構築が困難な理由を明らかにする必要があるため、前回からの宿題になっていた「リポジトリ構築が困難な理由」が未構築機関から、順次報告された。

- ・ 以前から大学側に必要性を説いてはいるが、反応が乏しく、学内の合意形成が得られていないため動き出せない。ただ、必要なシステムの準備は済ませている。共同リポジトリが立ち上がったとしても、合意形成を行わないことには構築へ進めないが、共同リポジトリは合意形成のための説明材料になると思われる。
- ・ スタッフ不足、構築のためのノウハウ不足、資金問題など種々の原因があるが、一番の問題はコンテンツ数の問題と考えている。共同リポジトリが立ち上がれば参加する方向へ持って行くのは比較的容易と考えている。
- ・ 機関リポジトリそのものの理解や、構築の必要性について学内での共通理解が十分とは言えない。情報発信を所管している部門との更なる調整が必要である。館内でも構築に対するノウハウ、システムに関する知識不足などの不安要素もある。
- ・ 学内の合意形成が得られていないことが最大の理由。また必要なノウハウやシステム知識が不足しているだけでなく、キャンパスが地理的に離れているため、職員間での情報共有、共通認識が進まないという問題もある。共同リポジトリが立ち上がっても、合意形成が必要なため、すぐに参加することは困難と思われるが、他大学の状況が見えてくれば合意形成にプラスになるとも考えられる。
- ・ 館長は積極的な姿勢であるが、具体的検討や館外への働きかけは着手していない。全学的合意の下で、方針を確立する必要があるが、端緒にもついている。情報発信は紀要を CiNii で公開しているが、リポジトリが意識されていることはないようである。

● 共同リポジトリの構築により問題が解決するか

次いで、共同リポジトリを巡る諸問題について意見交換が行われた。

- ・ 共同リポジトリはシステムや費用、情報共有の面で有効な支援策となるであろうが、学内合意形成などクリアしなければならない問題がある。大学側への説得材料として有効かも知れないが、兵庫県大学図書館協議会で構築することになれば、図書館の事業と受け取られる危惧もある。
- ・ ホスト機関への負担が大きく、現状では対応できる機関はないのではないかと。また、ホスト機関も合意形成の手伝いまではできない。合意形成やコンテンツ収集は個々の機関で行うものではないかと。
- ・ 総会でまとめられたアンケート結果でも参加すると期待できるのは少数にとどまるので、ホスト機関への負担が大きいだけであまり意味がないのではないかと。
- ・ 学術クラウドが立ち上がれば、地域性を生かした共同リポジトリでなければ意味がないのではないかと。地域では、情報やノウハウの共有だけでよいのではないかと。学術クラウドの詳細が明確になった時点であらためて検討する必要がある。

● WGの報告書について

このWGの報告書に「共同リポジトリを構築」、「単独でリポジトリを構築」、「学術クラウドでリポジトリを構築」それぞれのメリット・デメリットを一覧表にしてはどうかとの提案があり、次回までに、アンケートの質問事項をベースとして、各館で一覧表にまとめ、メーリングリストに上げることにした。

第5回

[日時] 平成22年2月26日(金) 14:00～

[場所] 神戸大学附属図書館自然科学系図書館 4F 会議室

[議題] (1) 「共同リポジトリの構築」以外で兵庫県大学図書館協議会ができる加盟館への支援策について
(2) ワーキンググループの報告内容について

[議事概要]

● リポジトリシステム構築方法の比較について

まず、前回からの宿題となっていた、リポジトリ構築方法の違いによるメリット・デメリットの比較表について、各館から提出された回答の確認を行い、取りまとめて、報告書に含めることにした。

● 「共同リポジトリの構築」以外の支援策について

コミュニティ形成についてはメリットがあるとの意見が多数を占めているので、具体的な方法の検討を行った。

1) 担当者間メーリングリストの運用

- ・ 兵庫県という身近な範囲で運用することで価値があると思われる。

- ・ 「担当者」というと既構築機関に限られるという印象を受ける。未構築機関も対象になるので表現を変える必要がある。
- ・ 任意参加としてリポジトリに関する情報を望む者に広く加わってもら方がよいが、大学ドメインのメールアドレスに限定するくらいの制限はあってもよい。
- ・ 参加資格としては、図書館職員に限定せず、リポジトリに興味や関係のある人に広く参加してもらえるようにしたい。

2) 「兵庫県大学図書館協議会」WEB ページの活用

- ・ 各機関で公開可能なりポジトリ関連情報のみを掲載し、メーリングリストとの住み分けを図るのがよい。
- ・ 機関リポジトリ構築支援業者に関する情報も掲載すると参考になる。

3) 勉強会や研修会の開催

- ・ 定期的な開催、DRF（デジタルリポジトリ連合）のようなイベント開催は難しいと思われるが、協議会が主催すれば参加もしやすい。
- ・ 必要な場合に開催できるよう報告に盛り込んでおくことが重要である。

4) 全般について

- ・ 機関リポジトリ構築支援を行うという協議会の声明があり、その上で各事業が展開される方がよいので、報告書にその旨提言することにする。

● WG の報告内容について

主査から、報告書の構成について提案があり、検討を行った。次回までに、原案を作成してメーリングリストに上げ、次回最終報告をまとめることとした。

第6回

[日時] 平成22年3月19日（金）14:00～

[場所] 武庫川女子大学附属図書館中央図書館

[議題] 「報告書作成について」

[議事概要]

● 報告書作成について

報告書原案の内容、文言、表現等について逐一検討し、修正を加えた。本日の修正を反映させた案を再度メーリングリストに上げ、最終チェックを行うこととした。

以 上


	NIIシステム基盤		共同リポジトリ		単独構築	
	メリット	デメリット	メリット	デメリット	メリット	デメリット
予算・経費	<ul style="list-style-type: none"> ハードウェアにかかる費用の軽減が期待できる 	<ul style="list-style-type: none"> ハードウェア管理面以外は不透明で、単独構築と同様の人的資源が必要となる可能性がある 	<ul style="list-style-type: none"> システム構築・運用経費を参加機関で負担することで、一機関の負担が軽減される 兵庫県大学図書館協議会が運営する場合は、同協議会からの補助が期待できる 	<ul style="list-style-type: none"> 参加機関が少ない場合は負担軽減が期待外れとなり、将来離脱による参加機関の減少で負担増となる可能性がある 	<ul style="list-style-type: none"> 自機関で全額負担しなければならぬ 	<ul style="list-style-type: none"> 予算の獲得、構築・運用のための知識の習得、実務等で担当職員に相当の負担が発生する
人的資源	<ul style="list-style-type: none"> ハードウェア管理の負担が軽減される 参加機関でのコミュニケーションが形成されれば、ノウハウの共有が期待できる 	<ul style="list-style-type: none"> 他の参加機関との登録件数の比較によりコンテンツ提供の意識が高まる可能性がある コンテンツ収集や著作権処理、トラブル対応等のノウハウ習得について参加機関の協力が期待できる 	<ul style="list-style-type: none"> ホスト以外の参加機関にはハードウェア管理者は不要 参加機関でのノウハウ共有、および業務の分担により各機関での負担は軽減される 	<ul style="list-style-type: none"> 登録対象の範囲・定義等で各機関独自の制約・要望・意向等への対応に制限が発生する可能性がある 機関の色は出しにくい 	<ul style="list-style-type: none"> 機関全体の事業として合意形成することによって構成員の意識が改革され、コンテンツが充実する可能性がある 登録対象の範囲・定義等にも自由度があり、独自のコンテンツ構成への対応も容易であることから機関の特色が出しやすい 	<ul style="list-style-type: none"> コンテンツ収集や著作権処理、トラブル対応等のノウハウ不足により、担当職員の負担増大とコンテンツ収集面での困難が予想される
コンテンツ (著作権処理を含む)	<ul style="list-style-type: none"> 国家的な事業であることから機関内でコンテンツ提供への意識が高まる可能性がある 					
独自性・自由度				<ul style="list-style-type: none"> 独自性は出しにくく、ある程度の独自性の実現にはカスタマイズが必要 構築に関わる多くの面で、参加機関が歩調を合わせなければならぬ 	<ul style="list-style-type: none"> 自機関の要望に沿った独自性のある構築が実現できる 	
継続性	<ul style="list-style-type: none"> 国家的な事業であり、継続性は高いと考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> 自機関では担保できない 他の構築方法に移行する場合はURLの変更が想定される 	<ul style="list-style-type: none"> 自機関では担保できない 人的・経費的な面や離脱による参加機関の減少など継続性への不安要素が多い 他の構築方法に移行する場合はURLの変更が想定される 	<ul style="list-style-type: none"> 外的要因は少なく、自機関で担保できる 		
地域での連携			<ul style="list-style-type: none"> 参加機関での協力関係がリポジトリ以外へ広がる可能性がある 	<ul style="list-style-type: none"> 参加機関で歩調を合わせなければいけない 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的にコミュニケーションを形成しなければ交流・連携は進まず、ノウハウ不足による不安や困難に直面する可能性がある 	



KGUR

関西学院大学リポジトリ


関西学院大学リポジトリ管理委員会
<http://kgur.kwansei.ac.jp/>
 kgur@kwansei.ac.jp



目次

- 関西学院大学リポジトリ とは
- 今なぜリポジトリか？
- KGURに登録対象となる研究成果
- KGURに登録するメリット
- 先行事例の紹介
- KGURに関するQ&A
- お問い合わせ先

関西学院大学 2




関西学院大学リポジトリ とは？


KGUR(Kwansei Gakuin University Repository)

関西学院大学で創造された研究成果を集約し、
無償で学内外に公開することを目的とした
インターネット上の発信拠点です。

リポジトリ = 保管庫



関西学院大学 3



今なぜリポジトリか？(1)

外国語学術雑誌の**価格高騰**（毎年10～20%の値上率）


↓

図書館 予算的に購入**規模の縮小**傾向

↓

研究者	研究者
読み手として	論文発表者として
↓	↓
研究に必要な情報の入手が困難に...	研究発表の機会が狭くなる

関西学院大学 4



今なぜリポジトリか？(2)

「**オープンアクセス(OA)化**」への動き

学術情報流通のイニシアチブを研究者の手に取り戻す

↓

インターネット上で、**無料で公開**
個人サイトや研究室レベルでの公開


↓

機関として**インフラ整備**が必要

↓


大学を核とした**機関リポジトリ**の形成

関西学院大学 5



KGURに登録対象となる研究成果

学術雑誌・学会誌掲載論文(プレプリント含む)、
 紀要論文、学位論文、学会発表論文・資料
 研究調査報告書
 (科研費成果報告書、COE報告書など)
 研究資料各種
 (ワーキングペーパー、テクニカルレポート、
 ディスカッションペーパーなど)



※ただし、**電子的なフォーマット**で作成されていること

関西学院大学 6

関西学院大学
KANSAI GYUUSEI UNIVERSITY

KGURに登録するメリット

- 1 研究成果を広範囲に発信できる。
(可視性を高める)
- 2 無料でアクセスできる論文のほうが、多くの人に読まれ、引用されやすい。(被引用率の向上)
- 3 研究成果を大学側が責任を持って管理・保存する
(永続的な保存)
- 4 他の大学・研究機関との競争力を高める。

関西学院大学 7

関西学院大学
KANSAI GYUUSEI UNIVERSITY

KGURに登録するメリット

- 1 研究成果を広範囲に発信できる
→可視性を高める

関西学院大学 8

関西学院大学
KANSAI GYUUSEI UNIVERSITY

KGURに登録するメリット

- 2 無料でアクセスできる論文のほうが、多くの人に読まれ、引用されやすい。
(被引用率の向上)

Stevan Harnad, *Comparing the Impact of Open Access(OA)vs. Non-OA Articles in the Same Journals*, D-Lib Magazine, v.10, no.6(June 2004)

関西学院大学 9

関西学院大学
KANSAI GYUUSEI UNIVERSITY

KGURに登録するメリット

- 3 研究成果を大学側が責任を持って管理・保存する。(永続的な保存)

- ・原稿・データの紛失、破損を防げる
- ・保存メディアの媒体変更などの手間がかからない (原稿→FD→CD-ROM→DVD、USBメモリ)
- ・個人サイトで公開→URLの変更・リンク切れ

関西学院大学 10

関西学院大学
KANSAI GYUUSEI UNIVERSITY

KGURに登録するメリット

- 4 他の大学・研究機関との競争力を高める。

- ・大学のブランド力の向上
- ・他大学の先行事例
- ・国立情報学研究所のCSI(次世代学術コンテンツ基盤共同構築)事業
「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」

関西学院大学 11

関西学院大学
KANSAI GYUUSEI UNIVERSITY

先行事例

世界の学術機関リポジトリ構築状況
すでに構築済みの大学・研究機関での学術リポジトリの構築で既成の構築済みです。
世界の機関リポジトリ：926

北海道大学	: HUSCAP
筑波大学	: つくばリポジトリ(Tulips-R)
東京大学	: UT Repository
千葉大学	: CURATOR
名古屋大学	: Nagoya Repository
広島大学	: 広島大学学術情報リポジトリ
山口大学	: YUNOCA
九州大学	: 九州大学学術情報リポジトリ(QIR)
早稲田大学	: DSpace at Waseda University
同志社大学	: 同志社大学学術リポジトリ

など、国立大学を中心に約50大学が公開・準備中


関西学院大学 12

関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

KGURに関するQ&A(1)

「リポジトリ? よくわからないので...」

→ 「KGUR」について広報サイトでご紹介しています。



関西学院大学 13

関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

KGURに関するQ&A(2)

「どうすればいいのか?」

→ 大学図書館で代理登録いたします。
※初回のみ『関西学院大学リポジトリ登録申請書』をご提出いただきます

電子メールにファイルを添付してお送りください。

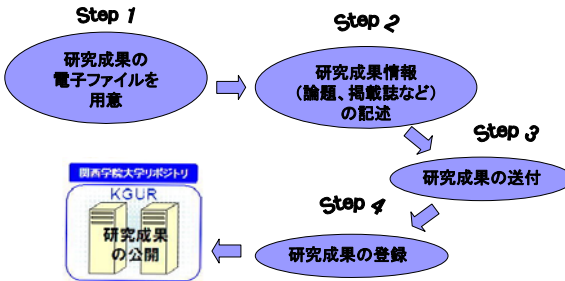
容量が大きいものは、記録媒体(CD-Rなど)を学内便でお送りください。

関西学院大学 14

関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

KGURに関するQ&A(2)

「どうすればいいのか?」



Step 1 研究成果の電子ファイルを用意

Step 2 研究成果情報(論題、掲載誌など)の記述

Step 3 研究成果の送付

Step 4 研究成果の登録

研究成果の公開

関西学院大学 15

関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

KGURに関するQ&A(3)

「著作権は大丈夫?」

- ①登録を希望されるご本人の著作権許諾
⇒ 『登録申請書』(初回のみ)を提出
- ②共著者の著作権許諾
⇒ 共著者の許諾を書面(書式自由)で提出
- ③発行元の著作権有無の確認
⇒ 洋雑誌 SHERPA/RoMEOホームページ
学協会 学協会著作権ポリシーデータベース
- ④ご不明な点があれば事務局まで

関西学院大学 16

関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

KGURに関するお問い合わせ先

もっと詳しく知りたい!

↓

関西学院大学リポジトリ管理委員会事務局
E-Mail kgur@kwansei.ac.jp

関西学院大学図書館運営課 TEL 0798(54)6122 内線30923
関西学院大学研究推進社会連携機構 TEL 0798(54)6104 内線31112

個別説明も行います。ご希望のかたはご連絡ください。

関西学院大学 17

共同リポジトリ

2009.12.18 兵庫県大学図書館協議会
機関リポジトリ支援のためのワーキンググループ

広島大学図書館 尾崎文代
fozaki@hiroshima-u.ac.jp

本日の話題

- 共同リポジトリとは
- 国内外の共同リポジトリ
- 共同構築のメリットとデメリット
- 共同リポジトリの今後の展開

複数機関による共同リポジトリ

複数機関で生産された教育研究成果等を
一つのサーバに蓄積・保存するリポジトリ



構築費用が抑えられる
技術・ノウハウを共有できる

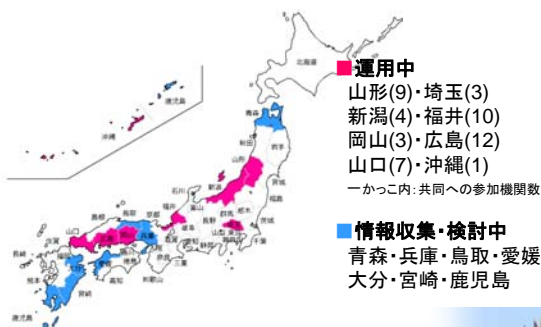


中小規模機関リポジトリ導入の障壁を除去
オープンアクセスの裾野拡大

共同リポジトリの例(イギリス)

- White Rose Research Online
 - リーズ・シェフィールド・ヨーク大学のコンソーシアムに成立
 - 三大学で一名雇用し、全ての業務を行っている。
 - <http://eprints.whiterose.ac.uk/>
- SHERPA-LEAP
 - ロンドンの学術成果のショウケースとなることを目的としてロンドン大学(UCL)のサーバに各機関のコピーを作成。
 - 2009年現在、13機関。
 - <http://www.sherpa-leap.ac.uk/>

国内の地域共同リポジトリ (2009.12現在)



国内の機関リポジトリ

	総数	リポジトリ数	うち共同リポジトリ
国立大学	87	68	
公立大学	89	7	4 (57%)
私立大学	580	38	18 (47%)
短期大学	434	7	7 (100%)
高专	64	4	4 (100%)
その他		5	4 (80%)

IRDBコンテンツ分析システム <http://irdb.nii.ac.jp/> より算出(参照:2009/10/18)

地域共同リポジトリの分類 1

- システム(ホスト大学との関係)
 - 同居一体型 (2) 山形・埼玉
 - 二世帯住宅型 (2) 新潟・沖縄
 - 同居店子型 (2) 岡山・山口
 - 別建管理人型 (2) 広島・福井
- システム(ソフトウェアの共有)
 - 独立型 (2) 岡山・山口
 - 共有型 (6) 山形・新潟・埼玉・福井・広島・沖縄

地域共同リポジトリの分類 2

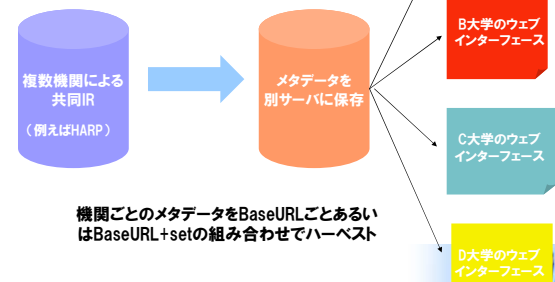
- 運営主体
 - 県大学図書館協議会・コンソーシアム (7)
 - 大学 (1) 岡山
- 参加機関
 - 大学等教育機関のみ (6)
 - 県内学術機関も (2) 福井・沖縄
- 運用経費
 - 均等に徴収 (1) 広島
 - 当面徴収しない (7)

共同リポジトリの課題1

一つのソフトウェアを共有することによる制約

1. 機関ごとのbaseURL
 - ハーベストに必要。 **カスタマイズ突續あり**
2. アクセスログの切り分け
 - 1つのソフトウェアに混在。 **ShaReプロジェクトで開発**
3. 大学ブランドの制約
 - 機関リポジトリ=機関のアピールである。
 - 個別のウェブ・URLが必要。 **ShaReプロジェクトで開発**

1つの共同リポジトリから各機関個別のウェブインターフェースを作成



共同リポジトリの課題2

作業の手間

- コンテンツ収集作業は単独機関リポジトリと同じ(ホスト大学が電子化している場合を除く)
- 小規模大学で人手がさけるか？

共同リポジトリの課題3

ホスティング機関の負担

- 自機関のコンテンツが増える？
- 純粋な地域貢献？
- インセンティブは？

共同リポジトリのメリット1

低コスト

- 参加機関で按分する
 - 例: HARP (広島)
保守費を12機関+協議会で按分(年間30千円)
- ホスト機関に包含されると当面無料も

共同リポジトリのメリット2

スキルの共有と連携強化

- 研修会の開催
 - 例: HARP (広島)
2~3ヶ月に1度 コンテンツ収集・情報共有

共同リポジトリのメリットまとめ

- 経費・技術・ノウハウの共有
- リポジトリ構築の障壁除去
 - **オープンアクセスの拡大**
- 連携強化
- サブジェクトポータル構築
 - **地域活性化・社会貢献**

地域連携の新しいモデル

大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について(審議のまとめ)

科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1282987.htm

1. 電子ジャーナルの効率的な整備
2. 学術情報発信・流通の推進
- 2-2. 機関リポジトリの今後の在り方と課題

その際、個別の大学等によっては、事務体制や技術的な問題等により独自でリポジトリの構築・運用を行うことが難しい機関もある。したがって、こうした機関に対して、**各機関が共通利用できる共用リポジトリのシステム**を構築することにより、リポジトリへのコンテンツの登載や公開が容易になるような仕組みを早急に検討する必要がある。

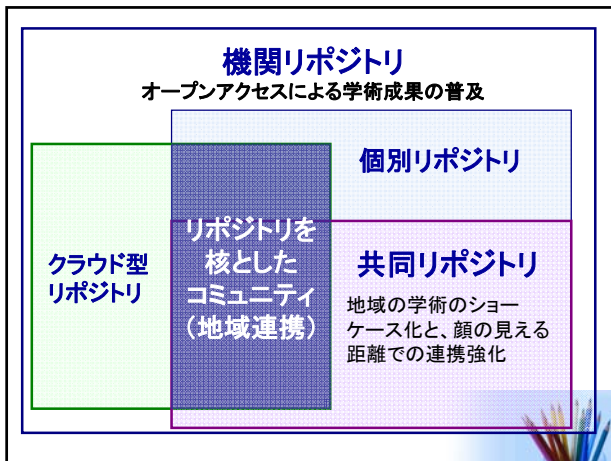
学術クラウド(仮)

学術クラウド型サービスによるリポジトリ構想 (国立情報学研究所)

1. 個々の機関や(地域)共同体が早期にリポジトリを実装するためのファシリティ(サーバ+アプリケーション)を提供
2. 科研費による研究成果のオープンアクセスが制度化された場合の受け皿

学術クラウド(仮)

- 選択肢の一つ
 - 各機関・地域の特性にあわせた選択
- インフラの提供
 - ノウハウ・スキルの共有のためには(地域)コミュニティが必要になる
- 平成22年度中の運用開始を想定



参考

- ・ 森保信吾, 尾崎文代. “共同リポジトリの試み—広島県大学共同リポジトリ(HARP)—”大学図書館研究 vol.82 (2008)
- ・ 中村三春. “大学コンソーシアムやまがたの活動とゆうキャンパスリポジトリ” 情報管理 vol.51 no.1 (2008)
http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/51/1/51_55/article-char/ja
- ・ Moyle, M. and Stockley, R. and Tonkin, S. “SHERPA-LEAP: a consortial model for the creation and support of academic institutional repositories.” OCLC Systems and Services vol.23no.2 (2007) <http://eprints.ucl.ac.uk/2663/1/oclc.pdf>
- ・ ShaRe 共同リポジトリ: モデルの構築と普及
<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/share/share.html>